製品開発におけるフロント・エンド・ローディング
― FELの骨格となるRCOM（Risk Control Method） ―

株式会社ジョンクェルコンサルティング
代表取締役　落合　以臣

Keywords
可視化・定量化・QCD・売上・利益・再評価

先日、6月2日に開催されました第50回日本経営システム学会全国研究発表大会（東洋大学川越校舎）で、「新製品開発の過程を可視化するための新たな方法」について、論文発表を済ませました。この発表は、複雑化した市場環境での新製品開発と研究開発の過程を可視化・定量化し、そこにおいて発生するさまざまなリスクをコントロールする方法として開発してきましたRCOM（Risk Control Method）を学問的な見地からまとめ、提案として発表したものです。少し内容をご紹介します。

「近年の製品開発現場での主要な問題のひとつは、スケジュールが押し詰まった段階でリスクが露呈し、そのリスクを回避するために開発当初に計画した量以上の経営資源（人、物、金）を投入して何とか製品を上市するものの、製品価値は不満足なものになってしまうという現象である。このような場合、確かに経営資源を大量に投入することにより上市することはできるが、製品開発の問題の根を絶つことができたわけではなく、開発当初に計画したQCD（品質・コスト・スケジュール（納期））を確保できたうえでの上市であったのかどうかはなはだ疑問が残る。上市するために、製品開発の要であるQCDのうちDを順守してCを増加させQを低下させているのかも知れない。言い換えれば、QとCを犠牲にしてDを守ることを選択しているのである。場合によっては、Dを守るために、製品価値そのものの基本的な機能を落すこともある。このような事態は、実際の開発現場で常態化しており、我が国の製品開発の衰退のひとつの側面を示唆するものである。」

特に、ここ数年この現象が顕著になってきています。確かに、企業運営にとって難しい局面にきており、グローバル企業として評価してもらうためには、売上、利益など様々な要因をクリアーしなければならないでしょが、表面をつくろうために企業を支える技術力、製品力を磨く重要性を置き忘れてきたともいえるのではなでしょうか。日本企業にとって、もう一度製品開発の原点を見つめ直すことも重要ではないかと思います。

この *JQ International Review* が、愛読される方の背中を押すことができれば幸いです。

All Rights Reserved. Copyright © 2013 Jonquil Consulting Inc.